



東日本大震災における 本学学生・教職員の 救援活動について



石巻市日和山より石巻港方面を望む。一帯が壊滅状態

美術品の寄贈ありがとうございました

本学に美術品のご寄贈がありましたのでご紹介いたします。

1 絵画「街の上で」(マルク・シャガール作)
寄贈者:南野知恵子先生(参議院議員元法務大臣)



この作品は、南野先生の執務室に飾られていたものを、本学学生にも鑑賞してもらいたいとご希望されたことから、今回の寄贈となりました。寄贈にあたり学校法人日本赤十字学園の大塚義治理事長から、南野先生に感謝状が贈られました。この絵は本学広尾ホールのロビーに飾られています。



左が南野先生、右が大塚理事長

2 ブロンズ像
「救援のために水を運ぶ婦人の像」
(彫刻家・岩田実作)
寄贈者:岩田実先生



この作品は、赤十字発祥の地であるイタリアのカステリオーネの赤十字博物館所蔵の像の日本版として、岩田先生が精魂こめられ制作されました。除幕式には多くの方が列席され、岩田先生の赤十字への熱いお言葉が述べられました。本学のシンボルとして本学広場に設置されました。



最前列右端が岩田先生

今回ご寄贈いただきました先生方からは、それぞれ本学に対する温かい思いやりが語られ、本学としても感謝の念に堪えません。先生方の作品は、学生のみならず、本学を訪れる多くの皆様にもご覧いただけますので、皆様のご来学を心よりお待ちしております。

3 絵画
「絢紗と子供たち」
(三代川豊子作)
寄贈者:三代川豊子先生



この作品は上野の森美術館の「第23回日本の自然を描く展(2010)」で上野の森美術館賞を受けられました。三代川先生の猫を愛されている素敵な作品です。本学の学生にとのお申し出をいただき、学生が一番使用する大教室のラウンジに飾らせていただきました。(写真は三代川先生)

大学事務局からお願い
(卒業生・修了生のみなさまへ)

ご住所・ご連絡先が移転・変更された方は、本学学務課宛にご一報ください。投稿もお待ちしております。また、卒業生・修了生向けのメルマガを年3回発行しております。是非本学のHP (<http://www.redcross.ac.jp/>) からご登録ください。

東日本大震災における 本学学生・教職員の救援活動について

日本赤十字社看護部主催

石巻赤十字病院業務支援活動

——中等症エリアの支援活動を通して——

国際・災害看護学 教授 小原真理子

東日本大震災で被災された方々にお見舞いを申し上げます。

3月11日発生した東日本大震災は死者数15,405人、行方不明8,095人(6月10日現在、警視庁発表)の甚大な被害をもたらしました。その後も余震が断続的にいたるところで発生し、災害急性期においては医薬品をはじめとする物資・燃料の不足、原発事故の影響による避難もあり、特殊な複合災害としての様相を呈しているのが特徴でした。

私は石巻赤十字病院への病院業務支援(第3班)の一員として、3月25日から1週間、病院の1階フロアに設置された中等症エリアの支援活動に従事しました。災害発生後3日目に石巻赤十字病院が受け入れた傷病者数は1,200人と報告されていますが、3月26日以後でも1日に約

く、私達でなくてもよいのではないかと考えて帰った人もいと聞く。5日でなく10日間ぐらいいるとIDも準備できるのを受け持ち患者を持ち関われる。受け入れる側も依頼しているのかとの遠慮があり、気遣いもある。スタッフとの関係をとって患者のためにスムーズに行えるようにする必要はある。

5月中旬では中等症エリアの支援期間を10日くらいに変更する予定である。一般病棟の応援は終了となり、ER部門だけの応援となる。

被災後1カ月半が過ぎ、被災地では徐々に外部医療支援チームが5月連休後、5月末には撤退する情報が発信されています。今後、医療チームの撤退は現実の方向です。行政側も自らの力で自立して行きたいと考える時期にきたことが、看護部皆様とお話の中から感じられました。住民が避難所から地域



石巻赤十字病院中等症エリアの状況(本社出典)

支援活動に参加して

基礎看護学 講師 田中孝美

3・11東日本大震災で被災された方々に謹んでお見舞いを申し上げます。日本赤十字社の看護部が組織した、石巻赤十字病院への病院業務支援(第3班)の一員

(元の生活)に戻る過程には時間がかかると思われまます。その戻る過程には、中長期に向けた持続的な看護支援活動が必要であると考えます。被災者のくらしや健康のニーズに応じた具体的な支援方法としては、住民リーダーの補佐役であり、また、被災看護職の役割遂行を支えることと捉えました。支援活動の一環として、今後は医療支援から、喪失体験に伴うこころのありようを支えながら、生活再建に伴うこころのケアが更に必要と考えます。

300名の傷病者が来院していました。理由は、壊滅状態の石巻市立病院をはじめ、市内の医療機関が復旧していないため、唯一機能している石巻赤十字病院に傷病者が集まるためでした。私達病院支援チームは、赤十字救護班をはじめ全国から集まった大学病院等の救護班と協力して、1日に約300名の患者さんの対応を行いました。この時期は災害サイクルの亜急性期に相当し、中等症エリアに来院する患者さんの疾病構造は、避難所生活や自宅生活上の健康状態悪化、肺炎、慢性疾患の悪化、消化管潰瘍など、震災による健康状態の悪化が殆どでした。診療の補助以外、行った看護ケアは観察、トイレ介助、苦痛の緩和、療養上の説明、移動の介助等でした。中には入院できない患者さんもあり、全部津波に流されてしまった方は避難所

に戻らざるを得ない状況でした。療養環境に適さない避難所の生活環境で、また病院に戻ることもありまました。この時、震災関連死を防ぐことが重要課題と考えました。次から次へと搬送される患者さんの医療対応に始終し、患者さんのお話をゆつくり聴く時間がなかなかとれませんでした。ケア時に数分でも避難所生活等についてお話を聴くようにしました。この時期、通院する患者さんの診療シートの保管システムが整備されていないため、前回の処置が把握しづらい状況がありましたので、主事さんに状況を伝えました。

石巻赤十字病院では災害急性期から、毎日朝夕(朝7時、夕方6時)全体ミーティングが開催されていました。各救護班の代表者や自衛隊が石巻赤十字病院会議室に集まり、当時でもリーダー格だけで約100名近くが、医療活動に関連する情報共有や要望などについて話し合っていました。みな疲労している様子で、感情的衝突で緊迫する場面もありました。3月29日まで救護班の人たちは、病棟の廊下か、外の救護車内で睡眠をとっていました。

のなかで、医療活動の継続が可能だった石巻赤十字病院に医療活動が集中し、自らも被災しながら不断の医療を提供し続け、休むこともままならない病院職員(看護師・助産師)を応援するために組織されていたことです。第3班メンバーは、看護師11名、助産師12名、津波被害を受けた石巻赤十字看護専門学校(石巻)の学校業務支援にあたる専任教員3名の26名で、全国の赤十字施設の職員から構成されていました。活動内容は、病院内の救急外来・助産センター・病棟に配置され、もともと勤務されているスタッフチームに加わってその部門が担っている看護業務を手伝うことで、スタッフの負担軽減をはかるのがねらいです。

派遣時期が震災後2週間を経過していたので、患者さんの多くは避難所での怪我、肺炎、消化管潰瘍、慢性疾患の増悪など、生活環境の変化やストレスによる健康状態の悪化がほとんどでした。私は入院病棟に配置され、日常生活行動の援助や入院受け入れ、採血など、自分ができることは何でも行いました。病棟の看護スタッフはお互い労りあって勤務していましたが、入院の患者数が多いうえ、かかりつけ医療機関が被災している場合は、病歴や治療歴のより丁寧な聞き取りが求められ、時には泥だらけのお薬手帳や持参薬を手分けして調べることもありまました。また、入院までの経過や、退院調整に必要なお話を患者さんやご家族から伺うことは、家を

その後4月23日、25日、日本赤十字看護学会災害看護活動委員会の企画により再度、石巻赤十字病院看護部を訪問する機会がありましたので、病院支援活動や病院の動向について聴きました。

1) 病院支援隊の姿勢として

助かったこと

第3班では、支援にきた看護職の間で申し送りノートを作り、次の隊員に現場で申し送り・オリエンテーションを行った。申し送りを丁寧に、具体的に、翌日からすぐ動けるように効率的に行っていた。自分たちでシステムを作ってくれたことは、助かった。

2) 支援活動の期間

大変な時期は短いスパンで、慢性期の長期化する時では長いスパンでと、切り替えていくことが必要であろう。病棟に入ると、短い期間では、救援に入った病院の看護システムに従って、患者と関わり看護記録を行うことには困難がある。今回は電子カルテへのアクセスができないので、看護周辺の業務となった。「仕事の満足感がな

失った、家人が流されたなど、個々の被災状況を知ることになるため、看護スタッフが被災されているにも関わらず患者さんの被災経験を職務上聴き続けていること、心理的負担がとて気がかりでした。被災地の支援においては、地域住民のケアにあたる援助職の方々のメンタルケアがとて重要で、石巻赤十字病院へは赤十字のこころのケアチームが継続的に派遣されておりまました。

ポスト3・11の歩みはこれからも長く続いてゆきます。今回、被災地で目にした被害の大きさに復興ということばを簡単に用いることはできませんが、平穏な日常を1日も早く迎えられることを願わずにはられません。



石巻赤十字病院にヘリコプター到着。ヘリ搬送も多かった

災害派遣ナース（日本看護協会）としての活動

地域看護学 講師 藤田淳子

災害派遣ナースとして、4月7日～11日（現地活動日4月8日～10日）まで派遣にいかせていただきました。派遣先は、石巻市にある学校の避難所で、避難者数は約300人でした。津波の被害のあった地区とは少し離れていたため、ライフラインは一部トイレをのぞいては上下水道、電気とも復旧しており、生活状況としては、食事は配給やボランティアの炊き出し、排泄は学校のトイレを使用、入浴は入浴施設への送迎などが行われていました。量や内容は十分とはいえませんが、生活としては比較的安定した避難所であったと思われます。衛生面では、先陣の医療者が被災者に対し清掃後のトイレ消毒を行うよう周知を図っており、感染症の発症はなかったと聞いております。

派遣中に行った活動の1つは、健康面でリスクのある人の把握でした。派遣初日に避難所の中を回っていたときに、たまたま被災者自身から「しばらく薬をのんでいない」との言葉を聞き、その内容を聞いてみると心臓病や肺疾患に関する薬でした。被災後1カ月近くたっているにもかかわらず、まだ医療にうまくつなげていない人たちがいることに驚き、私たちがまだ気づいていないリスクのある人々を拾い上げ、医

福祉サービスの交渉・調整など多岐にわたります。被災者が医療チームから医療機関へ紹介をされても、所持金がないため受診をすることに躊躇したり、移送手段のタクシードを支払えないことがネックとなり、継続医療ケアを確保することができない現状がありました。医療ケアを継続させていくためには、経済面のバックアップが必要不可欠であることを痛感させられました。

自衛隊によるシャワー施設やボランティアにより設置された温泉施設により、被災者の方々は清潔行為を確保できるようになっておりましたが、立ち上がりや歩行が自分一人ではできない方や身の回りの動作が自分一人ではできない方の入浴については課題となっていました。ちょうどタイミング良く、入浴サービス業者がボランティアで避難所を回っているとの情報を対策本部から受け、当避難所でも要介護者への入浴サービスを受け入れるために入浴サービス業者や学校管理者と設置場所等の調整を行いました。7名の何らかの介護を必要とする方々が、この入浴サービスを受け、被災後1カ月ぶりに入浴ができたことで心身の安楽が得られました。

当避難所には20名ほどの乳幼児と30名弱の学童の子供たちがおり、一見元氣に見える子供たちでしたが、トイレの回数が多くなっていたり睡眠が浅く早朝から起きてしまったりと、子供たちに避難生活での疲労やストレスがある様子がうかがえました。

療につなげていくことが必要と考えました。避難所を回り薬を使用している人や何らかの症状がある人がいないか声をかけて回り、被災後内服が中断されている人、内服しているが継続的に受診できていない人、風邪が長引いている人たちがいることがわかり、受診に関する情報提供等を行いました。また、すぐに医療が必要ではない人も、座りきりで運動不足の生活をしている可能性がある人、透析中であるが栄養管理ができていない人など看護師が今後フォローする必要がある人たちがお



トイレにおかれた手指消毒薬、石鹸、トイレ用消毒薬、被災者への説明

翌週から学校授業が再開されることになり、子供たちは学校再開をとっても待ちわびておりました。子供にとっては学業と遊び、交友関係が平常に近づくこと、なるべく早く「もとの状態に戻す」ことが重要であると実感しました。日が経つにつれて健

このたび東日本大震災で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

私は、3月20日（震災10日目）から6日間、日本赤十字本社看護部の派遣看護師第2班として石巻赤十字病院に行きました。当時は情報も錯綜し、東京でも燃料不足や、食料の買いだめなど非常に混乱していた時期でした。私は、テレビでの被災地の津波の映像から様々な事態を想起し、不安と緊張の中向かいました。もう東北はなくなってしまうたのかもしれないと想像していたのか、実際に石巻市に到着した時は、街があった、生活している人がいるという安堵感も湧きました。

私の任務は、不休で働き疲弊した看護師が休めるように業務の手伝いをするこゝとでした。活動初日は自宅や避難所では電気がなく酸素濃縮器が使用できずに病院の外来で寝泊まりしていた在宅酸素療法者の手伝いをしました。翌日からは、病

り、次の派遣ナースへ引き継ぎました。活動においては、これをしなさいという与えられた活動があるわけではなく、派遣された看護師が状況を判断し必要な支援を考えることが求められました。後から考えると、もつとこうすればよかったと思うこ

災害派遣ナース（日本看護協会）活動報告

国際・災害看護学 講師 岡本菜穂子

4月14日から17日まで日本看護協会災害支援ナースとして宮城県石巻市大街道小学校避難所へ派遣され、活動をしました。小学校の周辺道には、津波で流されてきた車や家具、がれきが散乱している状況下でありました。3月11日の大地震発生直後から当日夜中にかけて2,000人強の人たちが当小学校に避難しましたが、日が経つにつれて避難所で生活している人たちが自宅や親せきの家などに移動していき、活動期間中は290名程度の人たちが避難生活を送っておりました。被災者の方々は教室を避難居室として利用しており、教室毎の班長と避難所全体のリーダーが班長、市役所対策本部、学校教員、自衛隊等と調整、連携しながら被災者自主運営管理を行っておりました。支援ナースの具体的な活動は、医療チームと連携しながら診療の補助や被災者さん居室往診の際の補助業務、居室への巡回健康相談、要介



宮城県石巻市大街道小学校避難所にて（前列左が本人）

康相談内容や救護室に來られる方々のニーズは変化していき、支援も変化する必要がありますがありました。求められているものを常に考え、それを被災者の方と力を合わせて形にしてい、そんな支援活動を今後も続けられることを希望しております。

石巻赤十字病院での救援活動の報告

精神保健看護学 助手 吉田育美

棟で清潔ケアの手伝いをしました。お湯も貴重で、1人につき温タオル2本と手桶一杯のお湯で全身清拭をしていました。病院では、1日3食なんとか患者さんに提供されますが、その1食は小さな小さなおにぎ



左は岡田靖子（元本学助手）、右が本人

とが多々あります。しかし、被災者の生活を知り、今後の支援について考える機会になったことはとても貴重な経験でした。派遣にあたり、仕事内容の調整や事前の情報提供などの形で後方支援をして下さった職場の方々に感謝致します。

護者のケア（清拭や着替えの介助など）、共有スペースの環境整備、救護室での応急手当てなどです。その他、要支援者のピックアップと日常生活アセスメント、医療チームや他機関・ボランティアへの情報提供、保健

りと魚毎1個というあまりの悲惨な状況に、私は言葉を失いました。そして、そこで患者さんたちはひっそりとも暮らしていました。過酷な生活の中、文句も要求も言わず、それどころか「遠くから来てくれて本当にありがたい」と私たちを労ってくれるのです。かかわっていくと、患者さんたちは震災時の体験について語り始めました。私は、その体験の怖さに返す言葉もなく、その時を共有することしかできませんでした。「助けてくれ」と言う人の声が目から離れない」「どうしてこんな罰があつたのだろうか」などと語り、恐怖、悲しき、悔しき、怒り、絶望感など本心に複雑な被災者の気持ちを感じました。

病院スタッフは本当に多忙でした。続々とやってくる患者さんの対応に追われ、一瞬一瞬で大きな判断をせざるを得ない重責の中、自分の対応を後悔し自責の念を持つスタッフもいました。また、多くの患者さんを見るために、可能な患者さんは退院しなければなりません。帰る家のない患者さんのシビアな状況も理解した上で、何度も避難所や遠方の親族に連絡を取り、次の避難先を探すのに奔走していました。行き場がない、ここにおいてくれと訴える患者さんもありました。ある看護師は「なんです、追いつきません。私、嫌なことしてしまいますよね」と苦しい胸の内を話しました。少しでも多くの人を助けたいと思う一方で、苦しい判断をせねばならず心が引き裂

かれる思いを抱えていました。そして病院スタッフ自身もまた、被災体験で傷つきながら、援助職として働き続けている過酷な状況にあります。

患者さんもスタッフも各々が傷ついた体験を抱えています。苦しみにもじりと耐え、折れそうな心をなんとか保とうとしていることがひしひしと伝わってきました。これから

地域のちから

発達看護学Ⅱ(母性)、助産学 助手 山本由香

4月3日から6日までの4日間、宮城県気仙沼市の公民館で支援活動を行わせていただきました(日本看護協会災害支援ナース)。公民館に避難されている住民は250人ほどでした。ライフラインの復旧は、水道・電気・ガスが使用できる状況にありましたが、また地域の婦人会ボランティアにより、食事は3食炊き出しが行われている状況でした。震災1日目から被災されなかつたお宅を二軒二軒回り、お米をかき集めて炊き出しを始めたそうです。その時は500人もの避難所住民がいたため、休みなく食事を作っていたとお聞きしました。

そのときに比べると避難所住民の人数は減りましたが、まだ部屋に収容できる人数を超えており、消灯になると廊下にも雑魚寝される方々が多くいらつしやいます。4月ですが雪が降る天候で、また震災

街の復興、被災者の回復には、多くの時間と人のちからが必要です。私たちは被災者ひとりひとりの体験を大切に扱い、彼らの心にも関心を寄せて長く支援するということが重要だと感じました。一日でも早く穏やかな日々が戻るようお願いしつつ、私自身もできる支援を続けていきたいと思っています。

より3週間が経過した集団生活の中で、皆さんにも疲労がみられ、風邪症状の方が多くいらつしやいました。避難所生活では、発熱している人や咳込みの強い方を隔離することも容易ではないため、予防や現在の状況を悪化させないような活動が必要であると感じました。

前任の看護師が、感染防止対策としてマスクの装着、手洗いに関しては食前のアルコールによる手指消毒、含嗽についてはトイレの手洗い場にイソジンのうがい薬を設置し、いつでもうがいができるように住民に周知していました。私が着任したときには、住民のセルフケアにより継続されていました。

避難所は住民が主体となって運営しています。気仙沼市唯一の公設民営の公民館で、日頃から地域とのつながりが強い施設と評判でした。仮設浴場も住民が手分け

想っていました。たくさんの方が参加してくれたため、3月中7回の活動で126万6、101円集まりました。

5月、この募金活動の中心は学生であり、授業などもあるため参加者を募ることが困難になりました。また、募金活動よりも現地に行ってボランティアをすることの方がいいのでは、とも思いました。この時、文頭の疑問を抱きました。しかしせめて月1回でも活動を続けていこうということになり、5月8日に活動が行われました。3月ほどではありませんが「一緒に日本を支えましょう」と声をかけてくださる人など、募金してくださる方がまだいらつしやいました。

思いました。私たちが震災から目を逸らさないためと、現地にボランティアをしに行けない人に支援する機会を作る役割を果たすためです。支援を必要としている人たちがいて、支援したいという気持ちがある限り、私たちは活動を続けていかなければならないと思っています。役に立ちたいけど、ボランティアに行けない時は是非募金活動に参加してください。

時間が経ち、関心が薄れたと思いがす。しかし、被災者のためになりたいという気持ちは変わっていないと確信しました。それ以前に支援を必要としている人がいます。だからこそ私たちは今、募金活動を続けるべきだと



をして作り上げました。しかし、高齢者にはまたぎが高い、手すりがないなどの理由から、利用が困難なため入浴できていない人も出てきました。介助の工夫、また要介護者用の入浴サービスについて考えましたが、なかなか実践に結びつけることが困難でした。しかし公民館職員の会議でご相談させていただいたところ、一職員の方の自宅にある要介護者用のお風呂をご厚意で利用させていただくことができました。入浴後の高齢者の喜んだ姿を聞いた行政の方が、入浴サービスのあり方を検討してみますといわれ、継続して支援が受けられる期待につながりました。

避難所の環境は、地域の特性、地区の広さや集まってくる住民の人数によってさまざまであることを知り、災害前のコミュニ

募金活動を実施して

日本赤十字看護大学学部3年 石原さおり

「募金活動はもう必要なのか」「活動を続けていきたいが、参加者が少なく厳しい状況の中、頑張つてまで活動する必要があるのか」……5月に入り私たちは話し合いました。

3月11日の震災後、「何か出来ることはないのか」という声飛び交い、みんなの気持ちを形にしたいと思い募金活動を開始しました。災害看護の授業を受けた看護



気仙沼市公民館にて(右端が本人)

ティに基づいた避難所での地域力について実感しました。

募金活動の意義について考える

日本赤十字看護大学学部3年 幸田広志

東日本大震災に見舞われた3月11日、日本中の誰もがその惨状に悲嘆し、そして「何か少しでも力になりたい」と思つたはず。そのわずかな数日後、本学有志による募金活動は始まりました。「力になりたい」と思つても実行することができない人が殆どだったあの時期に、迅速に行動して具体的に形にしたその行動力に感動しました。

しかし、私は災害急性期における街頭募金活動への参加には消極的です。重要なのは、テレビや新聞などのメディアから被災地の情報が減り始めた頃からだと考えています。我々が街頭に立つて呼びかけるよりも、日本赤十字社や各テレビ局などへ送金した方が遥かに効率的に、多くのお金を集めることができますし、信用も間違いです。義援金を集めることが目的であるならば、多くの人数を動員して街頭で呼びかけるよりも、その分アルバイトをして、収入を全額寄付する方が遥かに効率が良いでしょう。では、募金活動は意味がないのでしょうか。私は、募金活動とは、人々の記憶から震災の悲劇を風化させないことこそが目的であると考えます。現在、被災地の現状を伝える報道はだいぶ減りました。人々の関心も、一向に活用されない義援金から被災地ポラ

ンティアへと移行しましたが、大型連休が終わり、これからはそれも下火になっていくでしょう。人々の関心が離れつつある今こそ、募金活動の真の意義を果たすチャンスであると思えます。その意義において、活動は募金に限らなくてもよいと私は考えます。

私は現在、6月に行われるクロアールジュ祭で、被災地の写真展示を企画しています。日本赤十字本社や災害派遣スタッフとして被災地入りをした先生、石巻市出身の友人などから写真をお借りして行う予定でいます。たとえお金は集まらなくても、街行く人々に今も苦しんでいる被災地の人々のことを思ってもらえれば、それだけで活動の意味はある、と私は考えます。

最後に、震災で犠牲となられた方のご冥福と、被災地の日も早い復興を心からお祈りいたします。

本学では東日本大震災、原子力発電所事故に関連した講演会を開催いたしました。

「放射能と生活」
土肥博雄氏(広島赤十字・原爆病院長)
5月10日(火) 13:10~14:40
広尾キャンパス

「東日本大震災支援活動報告会」
5月27日(金) 18:10~20:00
広尾キャンパス